

# 発話に伴う身ぶりについての一考察

－ストーリーを語る部分に注目して－

古 本 裕 子

## 1 はじめに

本研究はストーリーを語るときの発話に伴う身ぶりを分析することを目的としている。ここでいう身ぶりは発話に自発的に伴う手の動きや頭の動きを言う。ただし髪の毛や体を触ったりする動作や、手話のような独立の表現体系を持つものとは区別する。

今まで、身ぶりについてはノンバーバルコミュニケーションの分野で語られることが多く（例えばマレービアン1986, ヴァーガス1987）、言語に現れる明らかなメッセージに対して、隠されたメッセージを伝えるという文脈で語られてきた。それに対し、最近では発話中の身ぶりと言語が同じ認知プロセスを共有し、身ぶりを観察すれば人間の認知プロセスを知る手がかりになると考えられるようになった（McNeill 1992）。本研究はこのような身ぶり研究の流れの中に位置している。

資料は、日本語母語話者にビデオでストーリーを見せ、それを語るというタスクを与え、その場面をビデオカメラで録画したものを採用する。

## 2 先行研究

発話中の身ぶりに関する研究では、様々な方法で分類がされてきているが、一方では多くの分類に共通するカテゴリーがある。それは、イメージを表す身ぶりと、イメージを表さない動作とに大きく分けられていることである。表1は先行研究の分類をまとめたものである。

表1 先行研究の身ぶりの分類

		Ekman&Friesen (1969)	McNeill (1992)	国立国語研究所 (1987)	佐々木 (1993)	橋本ら (1993)
イメージを表す身ぶり	1 記号	emblems		模倣・ 象徴的動作		エンブレム
	2 指示	deictics	deictics	指示的動作	指示	指示的ジェスチャー
	3 描写	Pictographs kinetographs spatials ideographs	iconics metaphorics	模倣・ 象徴的動作	絵的表現 動作的表現 比喩的表現 比喩のその他	映像的ジェスチャー 説明補助的ジェスチャー
その他の身ぶり	4 強調	batons	beats	表出動作	その他	強調的ジェスチャー ビート
	5 感情	affect displays				感情随伴ジェスチャー
	6 偶発	adaptors		偶発的・生理的 動作		適応的動作

イメージを表す身ぶりには、エンブレム、指示、描写の項目が挙げられていることが多い。エンブレムは、身ぶりとそれが表すものとの関係がある程度記号化した身ぶりである。指示は指・手・体の一部を使って物・人・方向などの実物やイメージを指す。描写は物や人の形や動きを、手や体の形や動きで模倣する身ぶりである。

イメージを表さない身ぶりには強調の動作・感情表現・偶発動作がある。強調は、発話のなかで強調したいところで手を1・2回振ったり、小刻みに手を振る身ぶりである。また、感情は感情を表出するときによつて同時に出現するもので、偶発は特別の意味を表さない姿勢を含む動きである。

本研究も大枠としてこれらの分類に従う。しかし、イメージを描写する身ぶりをさらに細かく分けて観察していく。ストーリーを語る場合には、物や人物の様子や人物が移動したことを発話によって表すが、同時にそれと同じ内容を表す機能を持った身ぶりが出現すると考えられるため、その点に注目する。詳しくは4.4で説明する。

### 3 研究の方法

#### 3.1 被験者

日本語母語話者は、金沢大学の学生または大学院生、男女計6人である。この6人が同性の母語話者と、初級修了程度の日本語学習者に対しストーリーを語った。ストーリーの聞き手となる母語話者は前述の母語話者のうちの4人を含む計6人である。日本語学習者は、金沢大学の日本語研修コースの学生、男女各1人（F1、F2）で、母語はルーマニア語とブルガリア語である。分析する資料は、日本語母語話者に語る場合と日本語学習者に語る場合を合わせて12組である。なお、被験者はお互いに顔見知りどうしである。

#### 3.2 手順

机を二つ約120度くらいの角度をつけてならべ、ビデオカメラとテープレコーダーを3台ずつ置いて録画録音した。まず20分程度自由に会話した後会話を中断し、1人(話し手という)が5分間のアニメーションビデオ<sup>1)</sup>を見て、その内容を相手(聞き手という)に伝えるよう言われた。話している間聞き手は質問も確認も自由に行った。

#### 3.3 分析方法

##### 3.3.1 発話の分類

まず、音声テープを文字化した後、全ての発話を次のA・B・Cの3つに分類した。話し手の発話はAとB、聞き手の発話はCである。

- A 話し手がストーリー展開を語る発話
- B 話し手が自分の感情を表したり、聞き手と会話をする発話
- C ストーリーの聞き手の発話

ここでは、全体の会話の中でAの話し手がストーリー展開を語っている部分のみ分析する<sup>2)</sup>。

### 3.3.2 身ぶりを検出する方法

発話を分類した後、身ぶりを次のような方法で検出していった。

身ぶりは、「準備期、ストローク、消失期」（橋本ら 1993）で、一つの身ぶりの単位とする。同じ動きが連続しているものは連続している間を1つと数える。休止の部分がなくても、1つの動きから次に移ったら2つと考える。同じ動きでも1回休止があつてまた動きがはじまったら2つと数える。

## 4 結果と考察

### 4.1 会話全体の身ぶり数

ここでは、すべての場面の会話において、話し手の発話ABの部分で数え上げた身ぶりの数を示す（表2）。

表2 話し手の身ぶりの数

	各組平均度数	度数(12組合計)	比 率
A ストーリー展開	67.1	805	84.7%
B 応 対	12.1	145	15.3%
話し手の発話の合計	79.2	950	100.0%
合 計 時 間 (分)	5.0	60	
1分あたりの身ぶり	15.8		

話し手についてはA、B合わせて、950の身ぶりを収集することができた。この表から、話し手が一つの話語りを終えるのに、平均5分間を要し、その間に79.2回の身ぶりをしたことがわかる。一分あたりにすると、15.8回、およそ、3.8秒に一回の身ぶりを行っている。身ぶりが出現する部分の内訳を見ると、ストーリー展開を語る部分Aの身ぶりが84.7%を占めていて、ほとんどがこの部分に現れている。ただし、このことが展開を語る部分に身ぶりが集中している、またはBの部分に身ぶりが少ないということを示していることにはならない。これらについて検討するのは別の機会に譲る。

### 4.2 身ぶりの分類

次に、発話の内容と、表1にあげた先行研究の分類を参考にして、Aの部分で数え上げた身ぶりを分類した。また、表そうとする内容に注目した分類をするために寺村（1982）<sup>3)</sup>の文の分類、つまり客観的な事実をことばに表す分類を参考にした。ただし、一つの身ぶりの機能は一つに限らないのでそれらは全て記録し、この中で一番優勢であると判断した一つのカテゴリーに分類した<sup>4)</sup>。なお、発話との関係が見いだせない身ぶりは、分析から除外した。

### 4.3 身ぶりの表記

以下は本稿の表記方法である。なお、本稿では紙面の都合で身ぶりは発話の下に文字で説明した。なお、発話については基本的に話し手のみ表記する。

ポーズ：およそ0.5秒以上のものを（0.6）などと表記した。

下 線：身ぶりのストロークが現れる部分。△は特に強く現れている部分。

①、②：身ぶりの文字による説明と、発話部分とを対応させるための数字。

.....：紙面の都合で以下を略したことを示す。

### 4.4 ストーリー展開を語る部分に現れる身ぶり

Aの身ぶりは、ストーリーの内容をそのまま表す身ぶりと、ストーリー展開部分に出現するが、それ自体は意味を表さない身ぶりの二つに分けられる。以下に用例を示し、4.5で現れ方の頻度を調べる。

#### I ストーリーの内容をそのまま表す身ぶり

表1の分類例で見る「イメージを表す身ぶり」に当たるものである。この枠組み自体は先行研究に従ったものである。以下の分類はストーリー展開を語るというタスクに合わせて筆者が分類項目を作成した。

#### I.1 登場人物・物の動きを表す（動き）

○物の移動の軌跡を手の動きで表す例

（例 I.1.1）

J1：そこに①ゆきが ガサッとおちてきます。

①（右手を上から下へ急激に下げる）

この例では、雪のかたまりが落ちてくる様子を、右手を上から下へ下げるという身ぶりで示している。手は、雪が落ちるその軌跡を表していることになる。

○物の状態の変化を手の動きで表す例

（例 I.1.2）

J2：これにのると、①こうふたが、こうなってしまう。

①（ふたが、下に傾くように手を動かす。）

右手は雪の固まりを比喩的に表しており、通り抜けるための穴がその雪の固まりでふさがれてしまっている様子がわかる。しかもその固まりの上に乗ろうとすると、その固まりが傾いて危なく、前に進めない。その固まりの動く様子を、右手をのばしたまま、傾けることによって表している。

○登場人物の移動の軌跡を手の動きで表す例

(例 I.1.3)

J 3 : ピングたちがかぜをひいたとおもって、あわてて①かえってきます。

①両手の指を組み、その組んだ手を自分方向に移動させる。

お母さんが家に帰ってくるという人物の移動を、組んだ手をそのまま自分の胸の方向へ引きつけるという行動で表している。手は自分の方向、内側の方向、つまり家へ帰るお母さんの移動の軌跡となっている。

○登場人物の動作を手の動きで表す例

(例 I.1.4)

J 4 : なかよくなったからペンギン①どうしのあいさつ、くちばしと....

①(両方の指で一つずつ輪を作るようにして、くつつける)

この場合、両方の指で作っている二つの輪はそれぞれが、1匹ずつのペンギンを表している。二匹のペンギンが口をくつつけているという行動を、二つの輪をくつつけるという行動に置きかえている。

○登場人物の動作を実際にその行動をすることで示す例

(例 I.1.5)

J 6 : おんなのこがそのへんの①ゆきをひろって②ボールつくるんですよ。

①(下から何か拾う格好) ②(両手でボールを握る格好)

話し手が登場人物になりきって、雪をひろう、ボールを作る、という格好をする。この部分を話す話し手のほとんどがこの例と同様の身ぶりをした特異な例である。

○登場人物の発話を直接話法の形で語り、その時の動作も同時にするという例

(例 I.1.6)

J 4.1 : おんなのこ ①なめて②ピングに「どお」ってやるんですけど....

①(棒つきあめをなめる格好) ②(あめをさしだす格好)

登場人物の女の子になりきってする行動である。しかも登場人物の話す言葉を直接話法で語りながら、その時の動作もしている。

I.2 人物の姿・物の形を表す(姿・形)

○人物の姿・物の形を表すために手で形を作ったり、指で描いたりする例

(例 I.2.1)

J 2 : ①シーソーみたいになっているというか、あの、②たいらなんですけど....

①(手のひらを下向きにし机と平行に保つ)

②(前と同じ動作)

古 本 裕 子

この部分は、(例 I.1.2) の前の部分に当たる。ここでは、雪の固まりの形を手のひらを使って表している。ここでは、この手を動かして見せるというのではなく、単に形を表している。

### I.3 登場人物・物の位置を示したり、当面問題となっている人物を指す (位置・指示)

○人物や物の位置関係を表すために、目の前のある部分を指で示す例

(例 I.3.1)

J 2 : ピングが①こっちにのって②ここにあるボールを とろうとします。

① (人差し指で、机を押さえる) ② (さっきと違った場所を指で押さえる)

転がっていったボールをとろうとしているピングと、ボールの位置関係を指で示して表そうとしている。

○当面問題となっている人物を指す例

(例 I.3.2)

J 4 : だから①せんせいの ペンギンは (0.9) あ、②ピングーを (1.0) えーほかのせいとしようかいました。

① (右手で空中を指差す) ② (すぼめた指で指す)

ここは、先生、ピング、ピング以外の生徒という3者が存在し、紹介するという複雑な場面である。これらを間違いなく伝えるために、人物どうしの位置を決め、その位置を手で示すことで聞き手の混乱を避けようとしていると考えられる。

### I.4 人物・物を数える (数える)

○登場する人物を数え上げるときに指を立てたり折ったりする。

(例. I.4.1)

J 5 : で、①ピングってのと (0.7) それとその②おかあさん。それと、③ピングのおとうとかいもうとです。

① (人差し指を立てる) ② (2本指を立てる) ③ (指を3本立てる)

登場する人物を並べ立てているが、それぞれの人物を言うたびに、指を立てて、最後合計3人であることを示している。

## II ストーリー展開部分に出現するが、それ自体は意味を表さない身ぶり

表1の先行研究の分類例で見る「イメージを表わす身ぶり」に対して、「その他の身ぶり」とされていた身ぶりの中から、ストーリー展開を語るというタスクに関係して出現すると筆者が認めた2種の動作を挙げる。

## Ⅱ.1 強調する（強調）

○助詞の部分や文の終了部で手を振り下ろす例

（例Ⅱ.1.1）

J 4：そこで、え（0.8）①ピングともうひとりの②せいとは③にげました。

△

△

△

①②③（手を上から下に下ろす）

この場合、話し手は話している途中手を空中に浮かせている。そして、助詞や文末部分になるとその手をさっと下に下げ、すぐに上に戻すという動作を繰り返している。

## Ⅱ.2 リズムをつける（リズム）

○発話している間小刻みに手を振り続けることでリズムを刻む。

（例Ⅱ.2.1）

J 1.1：①でま、ピングは（0.7）まいっしょにいてもいいみたいなかんじで……

①（手を小刻みに上下させる）

ここで話し手は、（例Ⅱ.1.1）と同じように話している間手を空中に浮かせて手を振る。しかし、強調の動作と違うのは、上記の下線部分を発話している間ずっと小刻みに手を振り続けており、休止することがない。そのため、この部分全体で一つの身ぶりと判断されるものである。

## 4.5 ストーリー展開を語る部分に現れる身ぶりの頻度

ストーリー展開を語る部分に現れた身ぶり数を表3にまとめた。全体を見ると動きを表す身ぶりが多く（37.7%）、発話の区切りの部分で手を振るような強調の動作（21.2%）がこれに続いている。次に、位置を示したり（19.3%）、姿や形を表す身ぶり（13.8%）の占める割合が多い。

表3 ストーリー展開を語る部分に現れる身ぶりの内訳

	一組の平均	度 数	比 率
動 き	25.8	309	37.7%
位置・指示	13.2	158	19.3%
姿	9.4	113	13.8%
数 え る	1.8	22	2.7%
強 調	14.5	174	21.2%
リ ズ ム	3.7	44	5.4%
合 計	68.4	820	100.1%

## 5 身ぶり出現の特徴についての考察

### (1) 動きを表す身ぶり

本研究でのストーリー展開を語る場面で特徴的なのは、動きを表す身ぶりが非常に多いことである。ここで「動き」といっているものには、「物の移動の軌跡を手の動きで表す例」「物の状態の変化を手の動きで表す例」「登場人物の移動の軌跡を手の動きで表す例」「登場人物の動作を手の動きで表す例」「登場人物の動作を実際にその行動をすることで示す例」「登場人物の発話を直接話法の形で語り、その時の動作も同時にするという例」をなどが含まれている。

話の中での人物や物の動きを身ぶりで表す場合は、言葉で表現したものに加えてなんらかの情報を伝えている。付け加えられる情報はいろいろなレベルがあるが、例えば次のような例が挙げられるだろう。

一つは、言葉で表した動きをより詳しくするというレベルである。例えば、(例 I.1.1) では、「ゆきが ガサッとおちてくる」と言うと同時に手を振り下ろしているが、これは雪の落ちる速度を聞き手に伝えている。もう一つは、言葉で表現することをあきらめて、ほとんどを身ぶりで説明することを前提に発話する場合である。例えば、(例 I.1.2) では、「こうふたが、こうなってしまう」といいながら、ふたが下に傾くように手を動かしている。この場合、音声情報だけではどのようにふたが動くのかまったく分からないことになり、身ぶりの情報は非常に重要となる。

いずれにしても、話し手は言語を発すると同時に言語以外のモードも活用して、多くの情報を伝えるという効果を有効に使用していると考えられる。

もうひとつ、ここで仮説としてあげられるのは、「動かぬものよりも、動く物、動く人などが身ぶりに現れやすい」のではないかということである。身ぶりをすることは動くことであり、動きを表現することとはモードが近いために起きやすいという可能性がある。しかし、この仮説を検証するためには、いっそうの観察が必要である。

### (2) 強調の動作

発話の区切り部分で手を上下させるという強調の動作の割合も多かった。長い発話を記憶にとどめておくことは難しい。これに対して区切り部分を強調すれば、情報の固まりを把握できるという点で、聞き手の理解を助けるだろう。この動作も情報の伝達を助けるという観点から説明ができる。

### (3) 位置・指示を示す身ぶり

位置を示したり、登場人物や物を指示するような身ぶりが出現する頻度も高かった。これはどちらも実際の位置ではなく、話し手の目の前に作られたイメージ空間内の位置や登場人物や物を指し示しているものであった。話の展開が込み入って聞き手が理解しにくくなることを避けるために、どの人物がどの人物にしゃべっているのか、どんな位置関係にあるのかを示そうとしてこれらの身ぶりが出現していると考えられる。これらも、情報をわかりやすく伝達するという目的のために出現していると思われる。



(4) 物語の再現性の高い身ぶりについて

ところで、動きを表す身ぶりの中で、特に注目すべき「物語の再現性の高い身ぶり」がかなり観察されることがわかった。

民族学的な立場から会話を研究している菅原（1997）によると、物語の話し手は、物語を再現しようとして登場人物になりきって、直接話法で話しながら演ずるような場合があるという。本研究で得られた資料の中でこのような再現性の高い身ぶりとは次のようなものである。例えば、上記の4.4の分類のA 1 人物・物の動きを表す身ぶりのなかで（例A1.1.1）の「ガサッ」というような擬態語・擬音語を含んだ発話をしながら身ぶりをするものや、（例A1.1.6）の②のように登場人物の言葉を直接話法で発話しながら、その身ぶりを話し手がそっくり演ずるようなものである。

物語の再現性が高い身ぶりの出現度数を数えると、平均して1 場面5.8回合計70回の身ぶりが観察された。この結果から、話し手がストーリーを生き生きと再現しようとして使用する身ぶりもかなり出現していることがわかる。

会話中の様子を見ても、本当に楽しんでストーリーを話しながら上記のような身ぶりを行っている様子が観察されている。身ぶりというのは単に情報を伝達するためになされるという場合もあるだろうが、会話者が身ぶりそれ自体をすることを楽しむ、または会話に没頭すると自然と出現するような場合があることが伺える。

## 6 まとめと今後の課題

本研究では、ストーリーを語る場面に現れる身ぶりのうち、話し手がもつばらストーリー展開を語っている部分のみについて身ぶりを分類し、その種類や頻度を観察した。その結果、ストーリー展開に従って移動したり動いたりする人物や物の動きを示す身ぶりが一番多く、強調を表す動作や位置や指示を表す身ぶりがこれに続いた。これは言語情報に加えてより多くの情報を、相手にわかりやすく伝達するという機能から出現していると思われた。また一方では、身ぶり自体を楽しむような場合があることがわかった。

今後は、今回得られた資料がこの会話全体の中でどのような位置づけになるのかを検討する必要があるだろう。また、自然な会話での身ぶりの現れ方を調べ、その上で、今回のようにストーリーを語るというタスクを課した場合との違いを調べなければならない。

また、身ぶりと他の非言語行動、例えば視線行動（古本 1993）やうなづきを統合した形で研究を進めていきたい。

### 【注】

- 1) 素材はオットマー・グッドマン制作の「ピングー」シリーズを使用した。この物語はピングというペンギンが主人公のクレイアニメである。動物が主人公だが、内容は完全に擬人化されており、ピングは小学生ぐらいの男の子と考えることができる。話す言葉はどの国の言葉で

古 本 裕 子

もない言語が話されており、イントネーションなどの情報だけが伝えられる。

- 2) 益岡 (1991: 78) の表現類型によると、AもBも特定の聞き手に向けられた「対話文」の発話である。しかし、Aでは「話し手の知識を情報として聞き手に提供するという働きを持つ」「演述型」の文の発話のみが現れ、BCでは「情意表出型」「訴え型」「疑問型」「感嘆型」そして一部「演述型」の発話が現れると考えられる。

一方、McNeill(1992)は語られた物語の構造を、ストーリーの展開部分 (the narrative level)、ストーリー構造の説明部分 (the metanarrative level)、話し手と聞き手のコミュニケーション部分 (the paranarrative level) とに分けている。The narrative level と the metanarrative level を合わせたものを本研究ではAとし、the paranarrative level を話し手の発話のBと、聞き手の発話のCに分けている。

- 3) 寺村 (1982) の「コト」を表す文の分類のうち、動的事象の描写・感情の表現・性状規定・存在の表現・判断推定を参考にした。
- 4) 分析の信頼性を見るために、本研究と同様の条件で録画された会話資料を筆者と一人の日本語母語話者とで分類した。身ぶりの回数で94.2%と分類で85.9%の一致が認められたため、本研究の分析は筆者一人で行った。

<参考文献>

国立国語研究所(1987)『談話行動の諸相 座談資料の分析』三省堂

佐々木正人 (1993)「『発話にともなう手振り』の現れと視覚的他者」『発達心理学研究』第4巻 第1号 1-12

菅原和孝 (1997)「会話における連関性の分岐」『コミュニケーションの自然誌』谷泰編 新曜社

寺村秀夫(1983)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

橋本良明・見城武秀・小田切由香子・松田美佐・是永論・福田充・岡野一郎 (1993)「異文化接触状況の非日常性—まなざしの予期的過剰調整としぐさのエスノグラフィー—」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』No. 3 181-251

古本裕子(1993)『発話に随伴する視線行動の研究—日本語話者の場合—』名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻博士課程前期 修士論文

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

マレービアン, A. (1986)『非言語コミュニケーション Silent Messages』西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫 共訳 聖文社

Mehrabian, A. (1981) *Silent Messages -Implicit Communication of Emotions and Attitudes-*

ヴァーガス, M. F. (1987)『非言語 (ノンバーバル) コミュニケーション』石丸正訳 新潮社

Vargas, M. F. (1987) *LOUDER THAN WORDS-An Introduction to Nonverbal Communication-*

Ekman, P. & Friesen, W. V. (1969) "The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding" *Semiotica*, 1, 49-98

McNeill, D. (1992) *Hand and Mind-What Gestures Reveal about Thought-*, The University of Chicago Press